

## 第4章 世代を超えた熟議

### ～議論の成果～

#### 1. 議論の成果を捉える

昨年度開催した「熟議 2012 in 兵庫大学」同様「熟議 2013 in 兵庫大学」も、「熟慮」と「議論」で構成された。熟慮の段階での参加者で共通する意見については、第3章での分析に示した通りである。

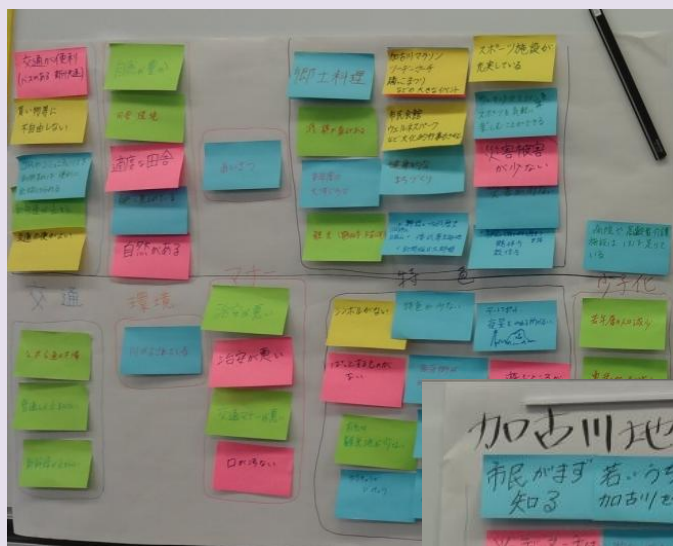
「熟慮」の段階での個々の意見は「議論」によりどのように変化したのであろうか。すなわち、参加者は「議論」により、加古川地域に対しどのような共通認識を持ち、未来像を描いたのか。そしてそこから、私たちがこれから為すべきことは見えてきたのだろうか。それらを知るには、「議論」が行われたグループ（テーブル）毎にそれを再現し、その結論を考察することが必要になる。

「議論」は、ワークショップの手法を用いている。参加者はお互い立場を越えて「議論」を重ね、そして結論を導いていく。その際に、ツールとして、付箋（ポストイット）と模造紙、そしてマジックペンを用いた。しばしばワークショップで使用されるが、KJ法の一部を活用する方法であり、自分自身の意見を付箋にマジックペンで記述し、意見の内容を説明しながら、模造紙に貼り付け、参加者が議論をしながら、付箋の位置を貼り替えたり、マジックペンで線を描いたりして、「議論」を模造紙に書き込んでいくのである。完成した模造紙は、「議論」の結果であると同時に、どのような意見が参加者から発せられたのかを記録したのものである。関連する付箋が重なり合い、またマジックペンで彩られたラインが交差するそれは曼荼羅図さながらに「議論」の世界観を示しているのである。

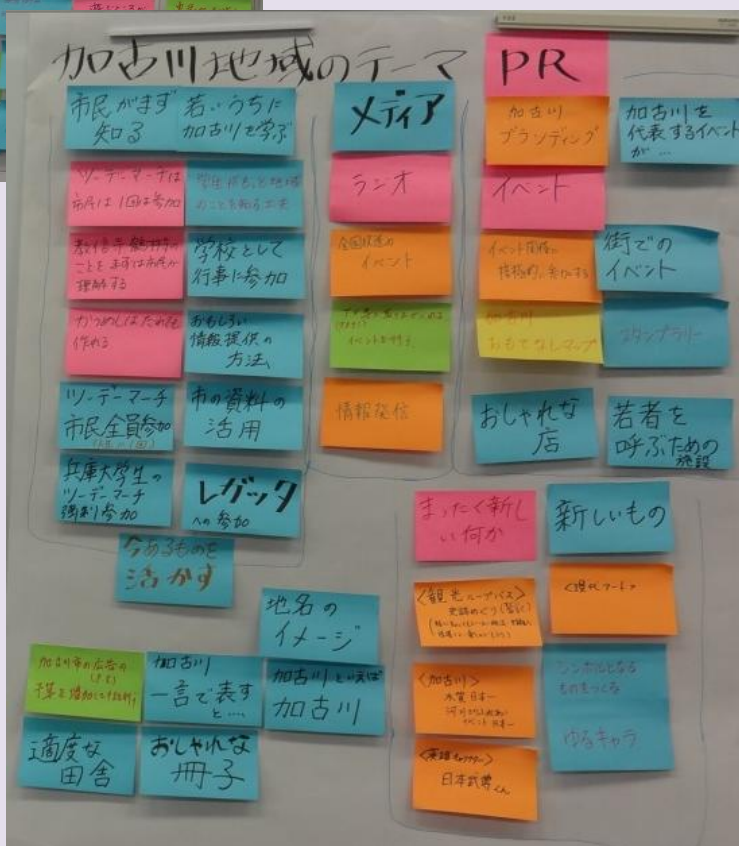
以下、当日模造紙に描かれた記録の写真を掲載するとともに、その下にグループ毎の議論を再現すべく【解説】として議論の要点を記述している。グループはAからKまで11あり、それぞれが前半では加古川地域の「強み」「弱み」について意見を出し合い、後半では前半出された意見よりテーマを選択し、そのテーマに沿ってさらに議論を掘り下げている。

（解説者 グループ A～C：小林洋司、D～F：井上朋子、G～I：木下幸文、J～K：北島律之）

## グループA



前半



後半

### 【解説】

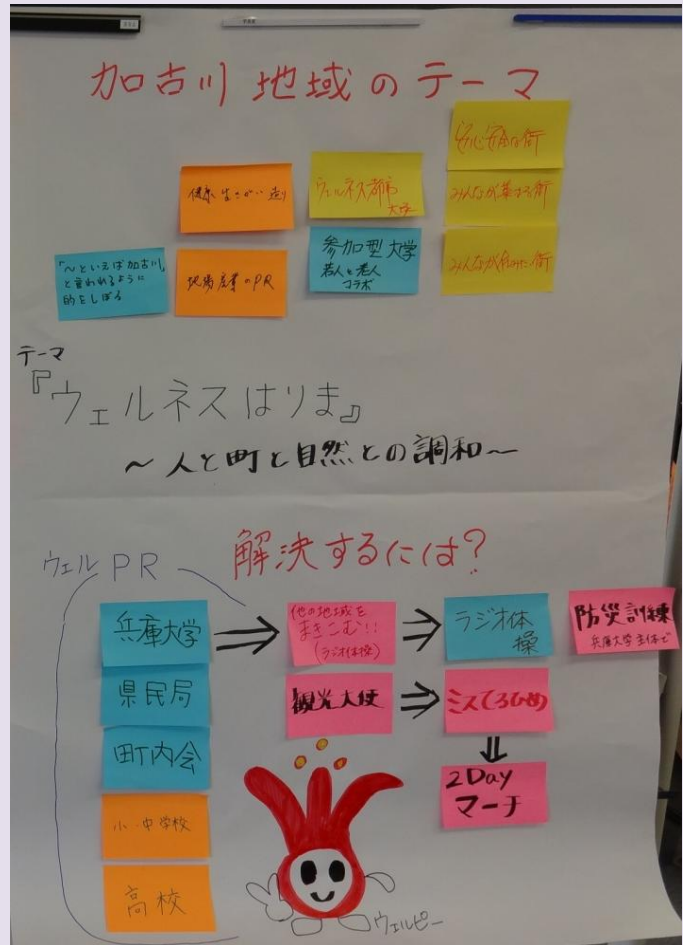
加古川地域の「強み」と「弱み」を出し合う前半では、ポジティブな評価としては、自然、ないしは文化的資源を有することが挙げられ、ネガティブな評価としては、治安、交通の不備やランドマーク、若者が集う場所の不足などが挙げられていた。

後半の議論では、「加古川地域をどのようにPRするか」ということと、「若年層を中心とした地域住民に対する教育」についての2点が論点として挙げられ活発な議論が交わされた。Aグループの議論として特徴的であったのは、加古川地域のPRについてその方法ばかりに注目するのではなく、地域住民の地域を知ろうとする学びの重要性に「未来への展望」を求めたことであった。そのなかで兵庫大学という存在が果たす、物理的、情報的なハブの役割があるということが議論されていた。

## グループB



前半



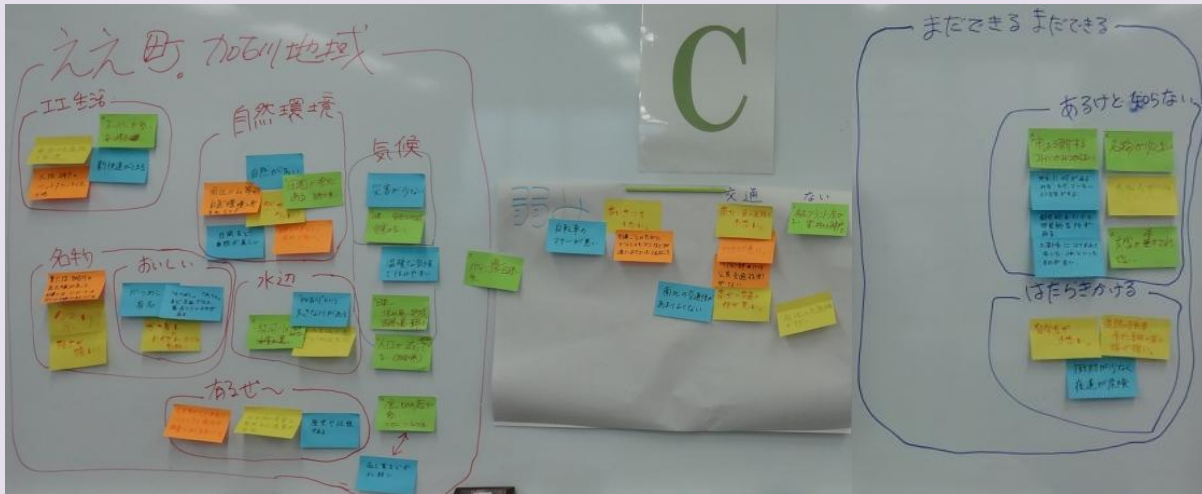
後半

### 【解説】

前半においては、川の重要性をはじめとした地理的な側面からプラスとマイナスの両方の意見が出された。また、町内会の組織率の高さ、災害が少なく、ベッドタウンとして住みやすいといった社会的な側面からの意見交換も行われた。そして交わされた意見を「人」「観光」「食べ物」「自然」「生活」といった概念にまとめ直した。

後半は、上記の分類を基礎にしながらか議論をより深めた。そして「イ（イベント）・食・住」という分類を提起し、「ウェルネスはりま」というテーマで未来づくりを行っていくという結論に至った。そのなかでの兵庫大学の役割として「話題提供」「防災活動」の拠点として活躍して欲しいという意見が出された。

## グループC



前半



後半

### 【解説】

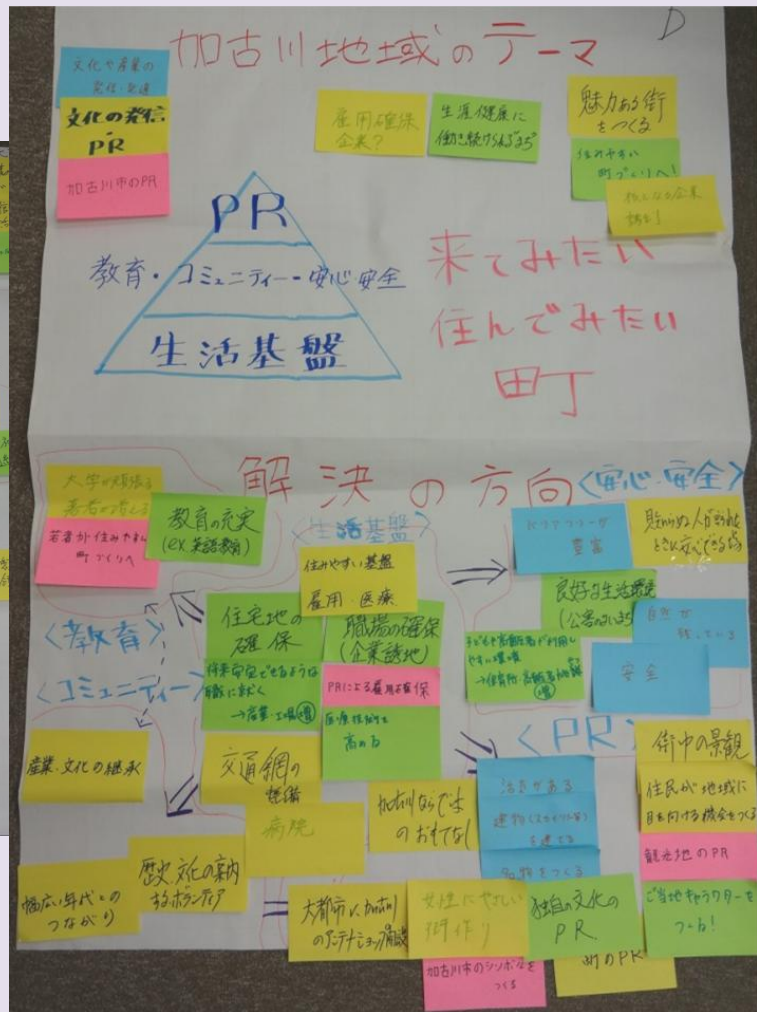
前半の議論は、「強み」と「弱み」を出し合い、それぞれに「ええ町、加古川地域」「まだ、できる。まだ、できる。」というテーマをつけ、現状と課題について意見交換が行われた。「強み」のテーマである「ええ町、加古川地域」としてまとめられた意見としては、①気候の良さ、②自然の豊かさ、③名物があること、④住みやすさ、⑤歴史・伝統・文化があること、などが指摘されていた。逆に「弱み」である「まだ、できる。まだ、できる。」というテーマで出されていた意見は、①長所はあるが知らないこと、②交通の便の悪さ、などが指摘された。

後半は、こうした意見の中から「加古川に来て、楽しい、住んで楽しい街にしよう」をキャッチフレーズにその方法について議論が交わされた。情報の発信の方法や、自治体や大学を中心にしたコミュニケーションの提案など有益な議論が交わされた。そうした動きの中で大学が実際に「行動していくこと」の重要性が共有された。

## グループD



前半



後半

### 【解説】

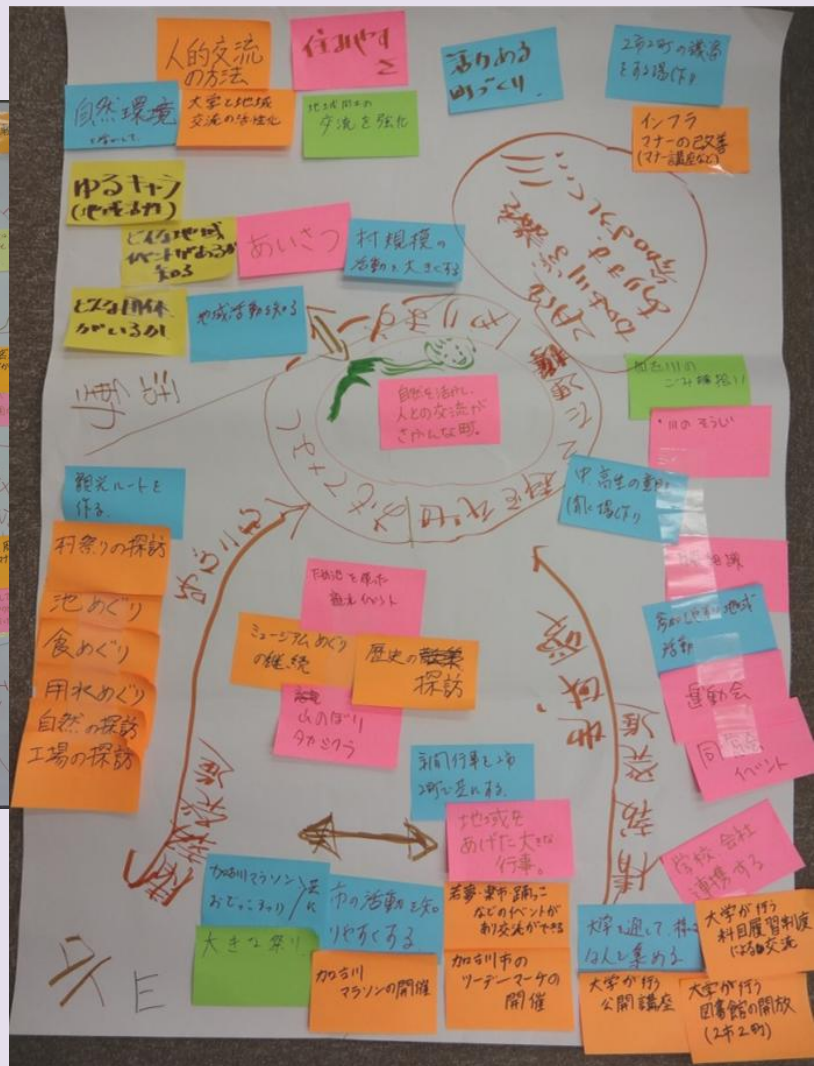
加古川地域の「強み」及び「弱み」として出された意見は、双方とも「住みやすさ」、「自然環境」、「交通」、「歴史・文化」の4点に集約された。

そこから、議論のテーマとして、「来てみたい町、住んでみたい町」が掲げられ、テーマの解決策が話し合われた。さらに、出された解決策は、「生活基盤」、「教育」、「コミュニティ」、「安心・安全」、「PR」に集約された。結論としては、三角ピラミッドの図を用いて、次のようにまとめられた。加古川を「来てみたい町、住んでみたい町」にしていくためには、まずは住居、雇用、医療等の生活基盤を安定させる必要がある。その上で教育を充実させるとともに、産業や文化が継承されるように幅広い年代のコミュニティを形成すること、そして、子どもや高齢者が安心・安全に暮らせる町づくりへと繋げていく必要がある。そうすることで、全国へ、世界へと、よりPRできるような加古川の町、文化、産業が成立していくだろう。そして、住民が「あの加古川」に住んでいるんだよ」と胸を張って言えるような町になっていくだろう。

## グループE



前半



後半

### 【解説】

まず、加古川地域の「強み」として出された意見は、「自然」、「産業」、「交通」、「イベント」、「歴史」、「食」、「住」、「施設」に集約された。一方、「弱み」としては、「交通」、「観光」、「交流」、「マナー・治安」、「インフラ」、「高齢化」、「都市の知名度」に集約された。

そして、後半では、「自然を活かし、人との交流が盛んな町」をテーマに、世代を超えて交流ができる加古川地域の町づくりについて話し合われた。その結果、加古川地域内では、イベントを行い、地域愛をもって世代を超えたコミュニケーションの場を増やすこと、加古川地域外へは、様々なイベントを企画するとともに情報発信を行い、人を呼び込む必要があるという結論に至った。具体的な活動方法としては、まずは人と人が繋がる基本となる「あいさつ」が大切である。また、「ゆるキャラ」も効果的であろうとされた。

## グループF



前半



後半

### 【解説】

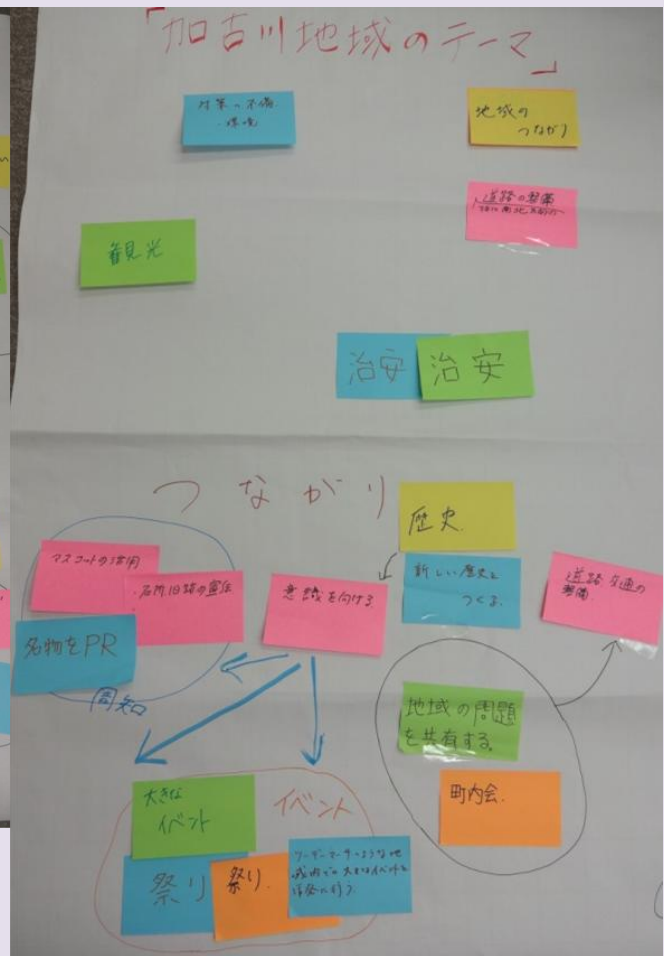
まず、加古川地域の「強み」として出された意見は、「自然が豊か」、「歴史が豊か」、「地域性」、「アクセスが良い」、「気候が良い」等に分類された。一方、「弱み」としては、「マナーと安全性」、「交通の不便性」、「認知度が低い」、「地域への愛着心」等にまとめられた。

そこから、地域に対しての愛着心を持つ人が減少していることに着目され、「地域への愛着心について」をテーマに、その原因と対策が話し合われた。原因には、若者にコミュニケーション力が不足していること、地域と住民の接点が少ないこと等が挙げられた。対策としては、若者が多数参加する行事やお祭りを増やす必要があるという意見が出され、それを実現するためには、地域や行政の協力、また個々の強い意志が重要であるとされた。また、より地域への愛着心をもった人々を育成するためには、普段から行政と連携を取る必要があるとし、小中学校の授業の中に地域について考える時間を取り入れる等といった具体策も出された。

## グループG



前半



後半

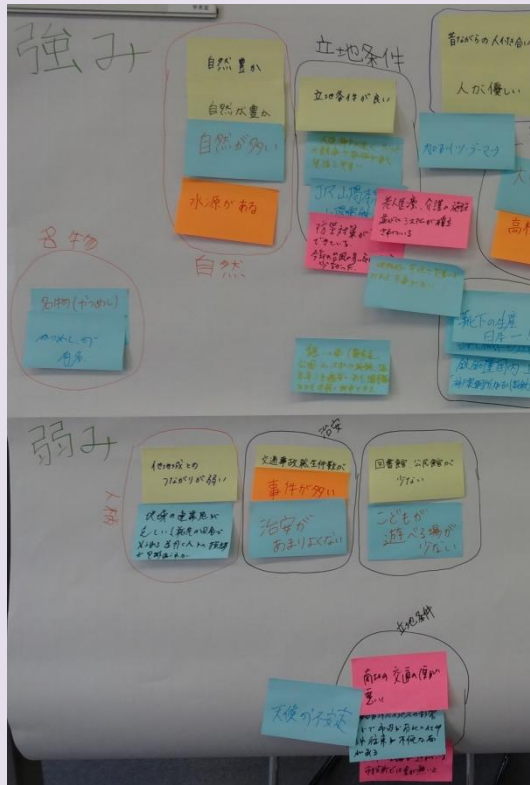
### 【解説】

前半の議論では、地域とのつながりや観光面などが加古川地域の「強み」として挙げられた。しかし、地域の「強み」と「弱み」の議論が進んでいく中で、加古川地域は都市間のアクセスがよいという意見の一方で、南北方向の道路整備が不十分であるということ、また地域の治安はよいという意見に対し、犯罪が多いという意見が出されるなど、様々な項目について中途半端な印象があるという結論に至った。

前半に挙げられた意見の中で、地域のつながりという点について後半の議論が展開された。地域のつながりをさらに強化して行く必要があると考えられるが、現状では、地域住民のそのような意識は低い傾向にある。この点を解決して行くためには、まず加古川地域の歴史について知る必要があるのではないかという意見が出された。そして、地域の歴史を理解することによって地域のつながりに対して関心が高まっていく。この歴史認識が高まることによって地域住民のツーデーマーチなどの大きなイベント参加に繋がっていくのではないか。また、マスコットや地域の名物など地域のよさをPRすることによっても地域のつながりに対して関心が出てくるのではないかという結論に至った。さらに、これらの問題に町内会などにも参加してもらう必要があるのではないかという意見も提起された。



## グループH



前半



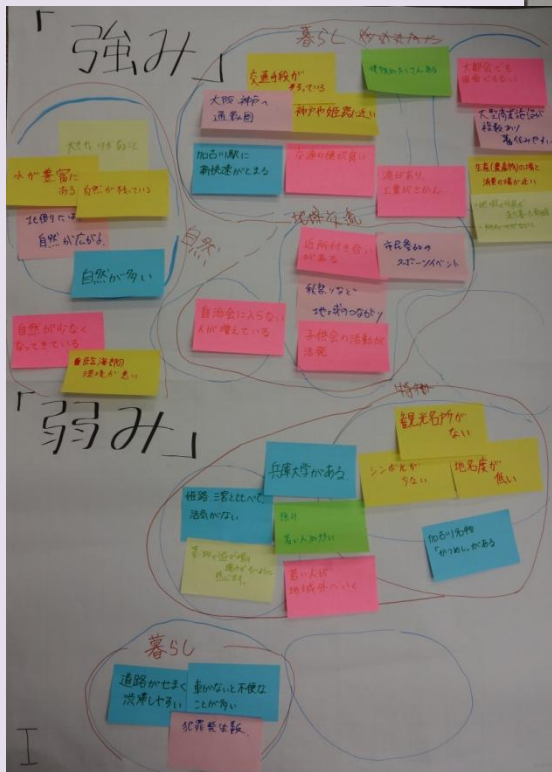
後半

### 【解説】

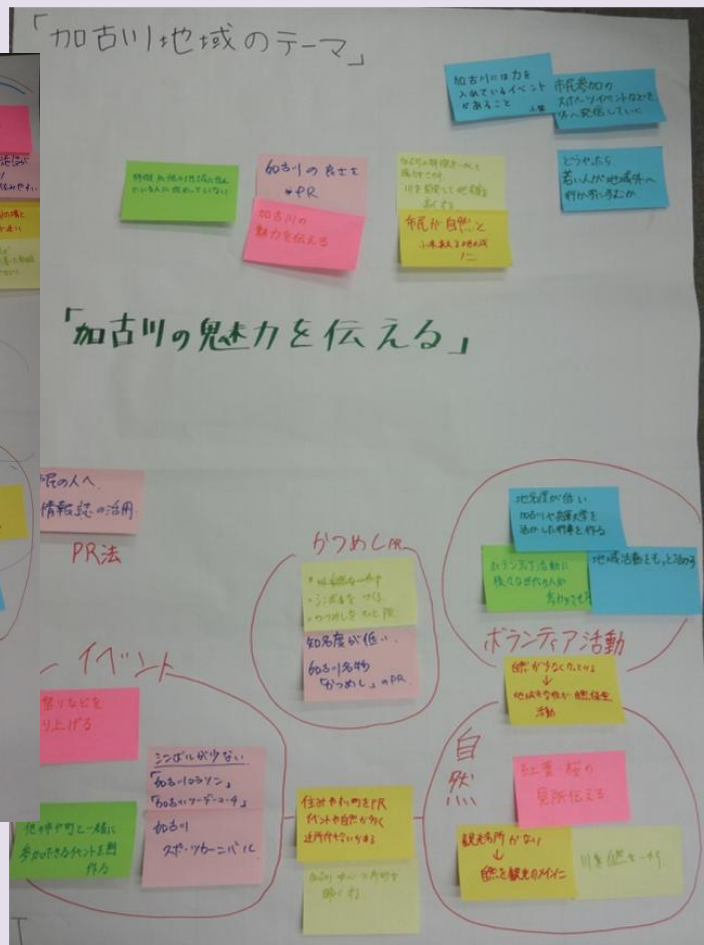
地域の「強み」としては、名物（かつめし）、自然（水源などもあり、豊か）、人柄のよさ、立地条件（交通アクセスや防災対策）、学校（大学、高校が多い）、産業（日本を代表する産業）という6つの項目に分類された。また、「弱み」としては治安（事故や事件が多い）、人柄（地域の連帯感が薄い）、立地条件（東西に対する南北アクセスの脆弱性）という意見が出された。

グループHでは自然環境を生かした交流の場をテーマとして後半の議論が進められた。後半の議論は「世代間交流」「健康づくり」「イベント」「地域の絆」という4つの項目に集約された。「世代間交流」では子ども会活動や老人会活動の必要性、「健康づくり」ではボーリングやマラソンなどのスポーツ大会、地域対抗の運動会などを開催するなどの意見が出された。また「世代間交流」や「健康づくり」を進めていくための「イベント」として、祭りの活性化、地域・学校の関われるような場を設定する、レジャー施設の拡充などが挙げられた。しかし、「イベント」を実施する上で世代・地域などのターゲットの設定や、地域性（2市2町）についてどのように考慮するかという意見も出された。グループの結論としては、イベントなどを行うことによって他地域との交流を進めていき、地域内においては声かけ運動や挨拶などによっていろいろな人とのつながりを大事にし、さらに「地域の絆」を深めていくことが大事であると結論づけた。

グループ1



前半



後半

【解説】

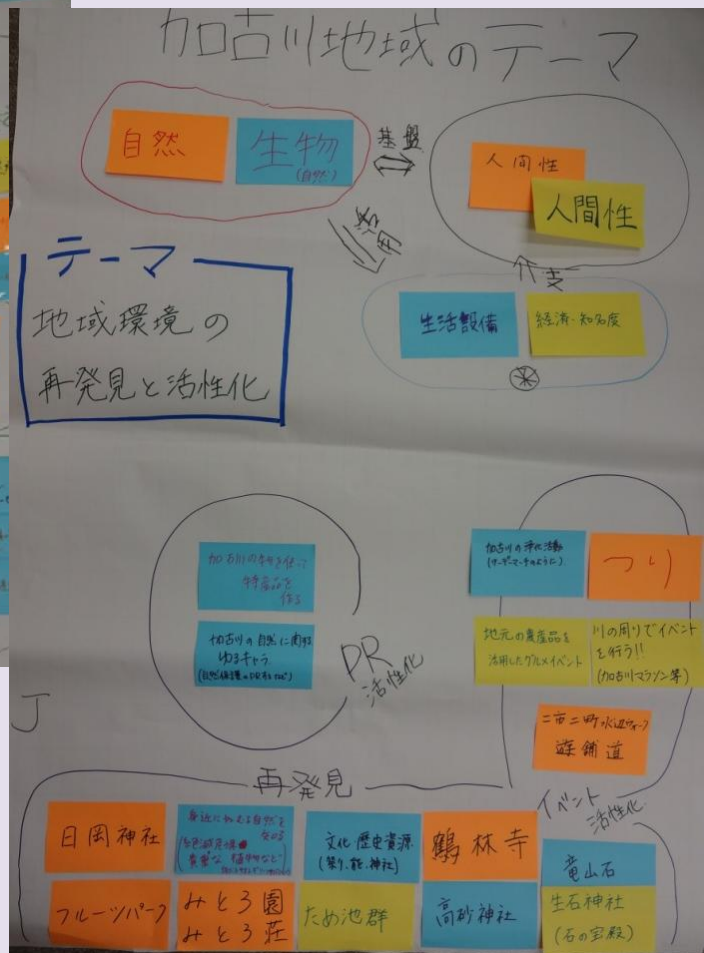
加古川地域の「強み」として「自然」「暮らし」「地域交流」が挙げられた。「自然」としては地域に自然が多く残っていることや水が豊富にあることなど、「暮らし」としては交通の便がよい、大型商業施設が存在する、大阪や神戸への通勤圏である、落ち着いた雰囲気のある街であるなど、「地域交流」として多数の市民参加イベント、秋祭り、子供会活動や近所付き合いがあることなどが意見として出された。また、「特徴」という分類項目では、兵庫大学やかつめしなどの強みもあるが、観光名所がない、知名度が低い、活気がないといった弱みもあることが挙げられていた。「自然」「暮らし」「地域交流」が強みとして挙げられたが、例えば「暮らし」については車がないと不便であることや道路が狭く渋滞しやすいなど強みと考えられる項目であっても弱みとして考えられるものもあるという意見もあった。

加古川の魅力をPRするためにはどのようにすればよいか（そのためには何が必要か）について後半の議論は進められた。魅力を伝えるための手段として、様々な祭りやマラソンやツーデーマーチなどのスポーツイベントを活用する、加古川名物であるかつめしをPRする、地域活動やボランティア活動、観光のメインとして自然を取り上げることなどがその方策としてまとめられた。

## グループJ



前半



後半

### 【解説】

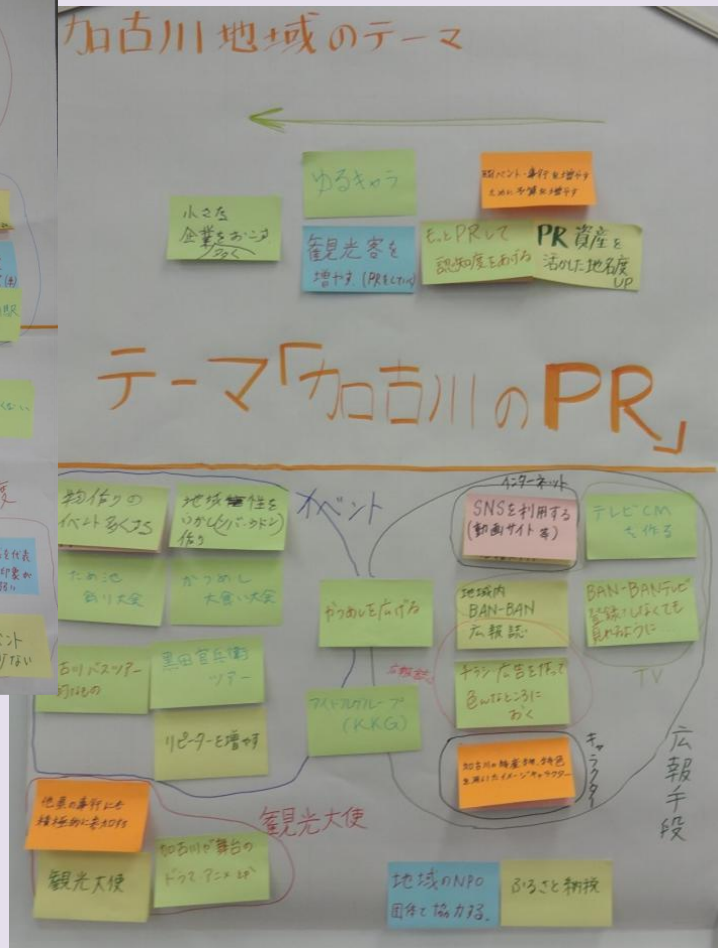
加古川地域の「強み」は、若者(兵庫大学がある等)、自然(山や川があり、気候が安定している等)、生活(必要なものが手に入る等)、人間性(人が優しい等)、知名度(歴史的遺産、かつめし等)、交通(新快速が止まる等)であった。一方、「弱み」は、経済(雇用が少ない等)、設備(娯楽が少ない等)、交通(南北への移動が不便等)、自然(大雨の後には河川にゴミがたまる等)、知名度(観光資源が少ない等)であった。

後半は、「自然」「人間性」「経済・地名度」にテーマを絞り、地域の活性化について検討した。自然を活用して経済を活性化し、人間性を高めることが有効ではないかという結論に達した。それを実現するため、川の周辺でのマラソンや地元の農産物を使ったグルメなどのイベント、日岡神社やフルーツパークなどの資源の活用、ゆるキャラなどを使ったPRなどが提案された。

## グループK



前半



後半

### 【解説】

加古川地域の「強み」は、地理(山、自然、気候等)、PR(ツーデーマーチ、大河ドラマ等)、交通(都市部へのアクセスの良さ等)にまとめられた。その他の意見として、生活圏として充実していることや、細い路地を1本入ると雰囲気の良い飲食店が多いことが挙げられた。一方、「弱み」は、少年高齢化(神社祭礼に参加する若者の減少)、田舎(就職できる企業が少ない等)、認知度(目玉イベントが少ない等)にまとめられた。その他の意見としては、治安が悪い、地元の就職先が少ないなどが挙げられた。

後半は、弱みを補うための活動、取り組みを話しあう中で、「小さな企業を増やす→特産物が増える→多くの人に地域を知ってもらえる→住民を増やすことができる→地域が活性化する」という過程を確認した。そのための具体策として、広報の見直し(地域のPR広告を全国に配布、SNSの活用、ゆるキャラの活用等)、観光大使の選出・活用、イベントの活性化(他市と協力してタイアップ、大河ドラマのゆかりの地への観光ツアー、かつめし大食い大会)、などを提案した。

## 2. 議論の成果

議論の前半の主な意見をまとめると、加古川地域の強みと弱みについて表のようになる【表 4-2-1】。まず強みとして、「自然が豊か」「生活のしやすさ(利便性が高く、気候が穏やか)」「歴史・伝統がある」「名物がある(かつめしなど)」などが挙げられた。次に弱みとしては、「産業が少ない」「娯楽施設が少ない」「高齢化している」「治安が良くない」「交通マナーが悪い」「地域への愛着心が低い」「知名度が低い」などが挙げられた。また、強みとも弱みとも言える項目も抽出された。「交通」については、鉄道を中心とした利便性が挙げられる一方で、南北方向は移動しづらいという意見が見られた。「イベント」は様々催され活況であると評価される一方で、不十分であるとするグループもあった。「地域のつながり」はグループによって「ある」と「なし」に分かれており、加古川地域内で参加者が深く関わる場所と関係する可能性がある。

強み	弱み	両面
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自然が豊か</li> <li>・ 生活のしやすさ 利便性が高い 気候が穏やか</li> <li>・ 歴史・伝統がある</li> <li>・ 名物がある かつめしなど</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 産業や娯楽が少ない</li> <li>・ 娯楽施設が少ない</li> <li>・ 高齢化している</li> <li>・ 治安が良くない</li> <li>・ 交通マナーが悪い</li> <li>・ 地域への愛着心が低い</li> <li>・ 知名度が低い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 交通 鉄道の利便性が高い 南北の移動が不便</li> <li>・ イベント 様々な催しがある 目玉イベントが少ない</li> <li>・ 地域のつながり グループで異なる</li> </ul>

表 4-2-1 加古川地域の強みと弱み

これらの地域の強みと弱みの解析を踏まえて、さらに掘り下げられた議論の後半では、主に訴えかける相手によって、大きく2つの系統を見ることができる。一つ目は、加古川地域に住む人が住みやすく楽しい町にしたいというものである。イ(イベント)・食・住という分類が提起され、その観点から加古川地域をより良い町にしていこうという議論は、その典型である。また、地域への愛着心を高めたり、地域の交流を促したりするべきだといった意見もあった。二つ目は、加古川地域の外にいる人たちにどのように加古川地域をPRしていくかというものである。前半の議論で多くのグループによって加古川地域の知名度は低いと指摘された。それを受けてPRの方策としてイベント、ゆるキャラ、歴史的遺産などの活用が提案された。

ただし、議論の2つの系統は独立したものではない。1つ目の系統の加古川地域の暮らしについて中心に議論したグループでも、2つ目の系統の外から目を意識した意見も出されており、逆もまた同様である。これら2つの系統は、つながりをもって捉えられるべきであろう。すなわち、住んでいる人たち

がより良いと思う町に変えながら、外に適切に情報を発信し、新たに住人を受け入れる。そして、さらに良い町にして発信する。そのような“循環型”地方都市の加古川地域を目指すことが、本熟議での議論全体から浮かび上がってくる一つの結論のように思われる。

本年度の熟議は三年計画の最初であり、まずは加古川地域の現状と課題について我々自身を知るといった意味が大きい。議論の中から加古川地域の強みと弱みを知り、今後進むべき道筋について、いくらかの明かりを灯すことができた。特に後半の議論で見られた2つの系統とそれらの循環は、次回以降の熟議の足がかりとなるものであろう。

(北島律之)